勘違い行進曲

野山日夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勘違い行進曲

【Ｎコード】

Ｎ６６２９Ｙ

【作者名】

野山日夏

【あらすじ】

ゴールデンウイークの中休みとなった月曜日、酒の失敗に苦悩する青年の話を始めとした、様々な人の勘違いの話。※オムニバス形式に変更することにしたため、タイトル改題いたしました。

各話について（最新話までのネタばれあり）

各話についての時期や勘違いの内容など。
各話が終わるごとに増えます。
タイトルが分かりにくいなぁ、と思ったので補足してみました。
一応各話、何らかの勘違いをテーマに話を書いているつもり。

1. 酒に纏わる或る男の失敗
　４月終わりから５月頭
　同衾した女性の年齢を勘違い

2. 一目惚れに纏わる或る女の執念
　６月終わりから７月頭
　店員と相思相愛だと勘違い

3. 異性装に纏わる或る男女の応酬
　６月から７月
　客引きした相手の性別を勘違い

4. 恋心に纏わる或る少年の決意
　７月頭
　同級生の家族の性志向を勘違い

5. ナンパに纏わる或る少女の出会い
　７月半ばから８月
　少女の性格を勘違い

1

からりとした天候はまさに五月晴れ。雲一つなく快適な清々しい朝に、子供達だけでなく職員室に集まる教員達も明日から始まる大型連休にどことなく浮かれるのがこの時期には当然見られる様子だった。

それは、普段どことなく疲れた顔を見せる教師達が週初めにも拘わらず明るい顔を見せることからも明らかだったし、中には真面目に職務に取り組む余り大型連休に向けて生徒に宿題を出そうと液晶画面の前に張り付く者もおり周囲の教師の苦笑を誘ったものだ。

そんな時期の職員室の一角に、しかし今日は浮ついた空気とは無縁の重苦しい空気を纏って頭を抱えて唸る男の姿がある。普段どちらかといえば早く来る方では　ない男だが、今日はこの中の誰よりも早く来ていた。そして誰とも話すことなくこの状態では、当然他の教師の興味を引いた。

余りの落ち込み具合　は、下手に声をかけるのすら躊躇われるほどだ。結局同僚達はその異様な光景に何をやらかしたのと、土日の間に彼の経験しただろうことを心配と好奇心を半々　に織り交ぜて想像しつつ遠巻きにするしか出来ない。男に気遣い、今日は連休の予定を話すのを皆控えている。

「山田先生、どうしたんですか？」

とうとう耐え兼ねたのか、男の同期が声をかけた。彼等は新卒同士それなりに有効関係が気づけている二人で、知り合ってから一月とは思えないほどに仲が良く、時々からかわれるほどの仲だ。

「あの佐々木先生が……」

「あんだけ美人な佐々木先生に問い詰められたら、俺なら何でも言っちまいそうですよ」

「やだ保坂先生、それ奥さんが聞いたら怒りますって」

勇気あるその行動に周囲の教師はざわめき、思い思いのことを口

にする。普段ならばそれなりに話をする相手であるから何かしらの反応はあると踏んでいた周囲の予想に反し、男は机から視線を離さない。完全に自分の世界の住人だ。これはどうやら重症らしい。
まぁ、まだ若いし何かしらの失敗は当然だ。そのうち立ち直るだろう。
そう結論づけ、周囲はそろそろ始まる始業時間に向けて準備をし始めた。

2

そんな周囲のやり取りにすら、男、山田卓哉は全く気がついていなかった。それよりも卓哉にはもっと優先的に懸案すべき事案があったのだ。

それは二日前に遡る。金曜の夜就職して以来初めて大学時代の友人である秀司と飲みに行った。大学を出てからの一ヶ月間仕事に追われろくに会えていなかった秀司との再会に、つい酒が進みすぎたのは否めない。

結果記憶を飛ばすほど酒を飲み、気がつけば土曜の朝、卓哉はチープな部屋に置かれたベッドの上で見知らぬ異性と同衾している、という事態に置かれていた。

それだけならばまだ卓哉もやってしまった、と悔やむだけで済んだ。大学生の頃だって酒を飲んでは記憶を飛ばして生きずりの相手と致してしまったことはあったし、どころかそれは女性経験を数える上でちょっとしたステータスのようにすら思えていた。

だが今回はそれが問題だった。

(どう見てもあれまだ高校生、いや下手すりゃ中学生じゃねぇかッッ！)

添い寝ならばまだ褒められはしないまでも辛うじて許されるだろうが、同衾までしてしまっていてはどう考えても教師失格の事態だ。教師、そう教師だ。卓哉は世間から聖職者と呼ばれる教師になったというのに、就任して僅か一月で既に教師生命の危機に見舞われた訳だった。

恐慌状態に陥り、辛うじて金だけ置いて部屋を飛び出してからのこの二日間、卓哉はずっとこの調子だった。

そもそも友人と飲んでいたはずがどうしてラブホテルなどに子供と入ったのかという疑問から始まり、酔っ払っていた己にどうして子供に手を出したのかを問い　詰める。かと思えば避妊はしただ

ろうか、もししていなければ高校生に手を出したのならば親に挨拶に行くべきだろうがその前に連絡先すらも分からず、そもそもこれを親に訴えられたら職も失ってしまうなどと思考のドツボに嵌まっていく。

ぐるぐる落ち着かない思考に、卓哉は今朝も家に大人しくしているということは出来ず朝一でこの学校に来てしまっていた。

「どうすりゃいいんだ……」

言った辺りでチャイムが鳴り卓哉ははっ、と時計を見る。一限の開始の鐘の音に、卓哉は慌てて立ち上がると己の担当する学級へと急いだ。

3

卓哉は何とか今日予定されていた授業を全て終えていた。だが自分でも分かるほどに卓哉の授業は上の空だ。

特に今終わったばかりの二年生の授業は酷かった。今日から新単元に入るということで教科書に載っている小説の音読を段落毎に区切って生徒にさせていたが、ぼんやりしているために生徒が読み終わっても気がつかず、生徒から次を催促され我に返ることも数度あったほど。

幸い明日からの連休中に予定はないので、その間に何とか折り合いをつけ、名も知らぬ情を交わした相手との一件に決着をつけなければならない。

そう決意をし教室を立ち去ろうとした卓哉に、甲高い声が掛けられた。

「やーまだっ」

その声に卓哉は苦々しい顔をする。新卒の教師はどうやら二年以上の生徒達の中では友人に準じた扱いか何かのようで、常に嘗められているのだが、その中でも特にそういった言動ばかりを取る少女ら三人に声を掛けられていたのだ。

「山田先生と呼びなさい」

こういった態度を取らせることと友好的な関係は別物であるし、特に新卒は嘗められてからでは遅い。そう指導されているため卓哉はぴしゃりとそう言うが、セーラー服に身を包んだ少女達はそんな大人の事情など意にも介さない。

「山田は頭固いなぁ」

呑気にそんな声を上げてけたけたと笑うばかりだ。卓哉は苛立ちを覚えたが、相手は子供だと言い聞かせて何とか己を押さえ込んだ。

「それよりさ、山田今日ぼうっとしてるけどもしかして色ボケ？」

「あれでしょ？　熱い夜ってヤツを思い出してるんでしょぉ」

教室で教師に振るのにこれほど相応しくない話題もあるまい、と卓哉の顔に苦々しい表情が浮かぶが、少女達はますます楽しげな様子を見せるばかりだ。

挙げ句多少声を潜めてではあるが、とんでもないことを言い出した。もしこの現場を同僚に見つかりでもしたら、懇々切々と教師として己の行動に対する責任を諭されるに違いない。

「私達知ってるんだからね！」

「金曜の夜、先生ったらミナちゃんと一緒にいたでしょ？」

「ミナちゃん？」

聞き覚えのない名前に誰何を返してから、卓哉は該当する人物が一人しかいないことに気が付いた。酔った弾みに卓哉が寝てしまった女だ。

だがそれを少女達は卓哉が惚けてみせたのだと思ったらしい。声に少しばかり己は知っているのだという優越感を織り交ぜて、少女は言う。

「ミナちゃんはミナちゃんよ。駅前の塾のミナちゃん。ごまかしたってムダよ。アタシ達先生達が密着して歩いてるの見ちゃったもん」

「あのミナちゃんが！　って思ったよね！」

「しかも冴えない山田と。ねぇ、あの後ホテル言ったぁ？」

きゃはは、と残酷に卓哉をけなす少女達の声は、しかしもう卓哉の耳には入っていなかった。

どうやら卓哉が体を重ねた相手は彼女らの知り合いらしい。どこの誰だか分かったのはよかったが、この姦しい三人娘に見られていたのなら、あっという間にこのことは学校中に広まるに違いない。もう教師生命は断たれたも同然だった。

「あれ山田？」

「……高校生があんま遅くまで出歩くんじゃない。あと山田先生、だ」

「ええーっ」

「山田頭固ぃ！」

何とか取り繕ってそう言い教室を離れれば、背後から不満たらたらの声が卓哉を追ってきたが、もう卓哉にはそれに相対するだけの気力も残されてはいなかった。

4

駅前の塾は今流行りの個別指導の塾らしかった。小学生から高校生まで幅広い年齢層の生徒がばらばらと出入りしているそこを、卓哉は少し離れたところから見守っている。
一度家に帰ってから卓哉はネオン煌めく駅前へとやって来て、ミナちゃんなる人物がいつ出て来るか、と先程からそこに立っていた。個別指導なのならもしかしたら今日はいないかもしれなかったが、いるかもしれないと思うといても立ってもいられなかったのだ。
職はすぐになくしてしまうだろうが、とりあえず社会人として責任は取らなければ。そう戦地に赴く軍人か何かのような悲壮な面持ちで塾の入口を睨む卓哉に、　奇異の視線を向ける者もいないでもなかったが、忙しなく歩き去る大抵の都会人は有り難いことに卓哉の存在を大して気に留めていないようだった。
ここに立ってから一時間余り。考えれば考えるほど緊張や何やら、筆舌に尽くし難い思いに襲われて、卓哉は無意識に懐を探った。緊張から震える指先で何とかタバコを一本取り出して慣れた仕種で火をつけたところで、親しみを込めて卓哉の名を呼ぶ声がした。
「あれ？　卓哉君じゃない」
その声に卓哉が声の主を見れば、ぎょっとする。片手を小さく振って、すぐ傍にあの女性がいた。卓哉を見上げて来る顔に浮かんでいるのは極々穏やかな表情で、まさに知人を見かけたから声を掛けただけらしい。
ミナは白のブラウスに黒のジャケットとスカートという出で立ちで、見上げて来る顔立ちは薄く化粧をしているのも相俟って記憶より多少大人びて見えた。
「メアド教えたのに。直接会いに来てくれたんだ？」
どうやら携帯にミナの連絡先が登録されていたらしいと知り、卓哉は苦笑した。二日間全くそのことに思い当たりもしなかった自分

がどれだけ混乱していたかを思い知った自嘲の笑みだ。
「ってか先に帰っちゃったから脈がないのかと思っ、卓哉君？」
ミナを正面から見た途端、卓哉は口の中が渇いたのを感じた。相当自分は緊張しているようだと思いながらミナの左手を取るとミナは卓哉の名を呼ぶ。
「その……だな」
「うん？」
「——俺は金曜すごい酔ってて、酔った勢いという奴で君に手を出してしまい、だからといって覚えてないのは理由にならないと思うし……その、まだ子供の君にとんでもないことをしてしまった責任はきちんと取ろうと思う」
話を聞いていたミナの表情が段々訝しげなそれに変わっていくのを見て、卓哉はミナが何か言う前にと早口でまくし立てた。
「俺は多分仕事を懲戒免職とかにされると思うが、最悪バイトだろうがやって何とか君を養って行けるだけの努力をしようと思う」
そして卓哉は勢いよく頭を下げた。
「だから結婚を前提にお付き合いをさせてもらえないだろうか」
しん、と静まり返る空気に、卓哉は恐々とした。何も言い出さないミナが心中でどう思っているのか分からないことがこれほど恐ろしい。
ややあってから、ミナがぽつりと感情のない声で言った。
「そっか、忘れちゃったんだ？　そっかそっか」
その声に卓哉はそら恐ろしさを覚えたが、その前にミナがにこりと笑った。満面の笑みには先程までの怒りなどかけらも見えず、それがまた妙に恐ろしい。
「いいよ、結婚しても。酒の失敗しないでくれるのなら。学生結婚とかって憧れるし」
酒の失敗の辺りが妙に刺々しいのは卓哉の気のせいではないだろう。その辺りは卓哉も頭を下げて反省の意を示すしかない。
そこでミナが一息区切った。

「ただ、」
何か言いさしたミナの言葉を、しかし遮るようにいくつもの声がミナに掛けられる。近所の中学の制服姿がいくつもミナの背を抜き様声を掛けていく。
「あれ、ミナちゃんじゃん！」
「ミナちゃんさよならー」
「あれ、ミナちゃん彼氏とデート？」
「あんた達ねぇ、先生ってつけなさい。あと人の私生活詮索する暇があったら勉強しろー」
そんな彼等の背中にミナが声を投げ掛ける。返された返事だけは優等生だったが、その声に全くミナの言い付けを守る気がないことは明白だった。
「はーいミナちゃん先生」
一連のやり取りをつい呆然と見つめていた卓哉に、ミナは振り返ると悪戯っぽく笑う。
「私、卓哉君が思っているより年上なんだけどいいかな？」

5

ミナが語るところに因れば、ミナは現在大学の四年だという。とはいえ年は卓哉と同じだそうだ。それが信じられず不躾な視線でじろじろとミナを見遣ると、ミナは気分を害したらしかった。
「確かに私は童顔ではあるけど、だからって流石に五歳もサバ読めないって」
ぷぅと頬を膨らまして言うミナはやっぱり化粧の力をもってしてもまだ高校生にしか見えず同い年とは認めがたかったが、ほら、と免許証まで見せられては、卓哉は渋々ミナの年齢を受け入れた。
場所は移って駅前のデパートのレストラン街の一角。感じのいいイタリアンチェーンに卓哉を招いたミナは、クリームたっぷりのパスタを口元へ運ぶ。それを見て卓哉も己のパスタ皿の中に転がるアサリにフォークを突き立てた。口に運んだ瞬間広がる汁に、卓哉は舌鼓を打つ。
因みに、ワインを薦めたミナだったが、酒の失敗をしたばかりの卓哉なので遠慮した。
そうしてミナが面白そうに金曜の真相を語るところによると、卓哉と秀司が飲んでいた居酒屋で偶然にもミナも友人と飲んでいたらしい。友人と別れ際になって高校時代の同級生である秀司の姿を見つけ、声を掛けたのだという。
「私も相当酔ってたから遠慮とかなかったっていうか。ああ、卓哉君はその頃にはべろべろだったから覚えてないんだろうね」
ミナの指摘の通り、さっぱり卓哉にはその記憶がなかった。完全に記憶が飛んでいる。
「んで私はそこに紛れてまた飲み始めて、そしたら卓哉君とすごい意気投合したんだよね。まぁ酔っ払い特有のノリのよさなのかもしれないけど」
記憶が飛ぶので卓哉は自分では今一つ分からない。だがかなりの

絡み酒らしくお前と飲むのは面倒臭いから嫌だと言う友人もいるので、そんな酔い方をする自分と意気投合というのもすごいものだと思った。

「秀司が終電だから帰るって言ったときも盛り上がってたから私達は残って、まぁ当然終電逃して。んで朝まで時間潰そうってカラオケか何かに行くはずだったんだけど、」

大学時代よくやった朝まで遊ぶ典型的なパターンを選択したらしい己に頭を抱えた。勤務先が近いから駅前には出来る限り寄らないようにしていたというのに、身についた習慣は消えないようだ。

「なんかいつの間にか愚痴の言い合いになって、そんで仕事が忙しくて異性と知り合う機会がないって卓哉君が憤慨してさ。後は生徒に対する愚痴とか」

確かに教職などしていては機会がないのは常日頃から思っているが、それについて愚痴を漏らしたようだ。

「私も塾講なんてやってるから気持ち分かるし盛り上がっちゃって、こんなに気が合うんだからもう結婚するしかない、みたいなノリ？　それでアドレス交換してカラオケじゃなくラブホ行って。酔っ払いって思考が短絡的だよね、うん」

そこから先は卓哉も知っている。高校生と事に及んだと思い込み、金だけ置いてホテルから逃げ出したのだ。

あっけらかんと放たれたが、卓哉は頭を抱えた。とんでもない論理の飛躍が間にあるが、完全に同意の上の流れだった。そして、自身の酒癖の悪さとやらを卓哉は初めて自覚することが出来た。そんなノリに絡まれるのは酔っていなければとんでもなく煩わしいに違いない。

聞いているうちにいたたまれなくなり卓哉は頭を抱えて卓に突っ伏していた。

「私も朝やっちゃったなぁ、って思ったけど、卓哉君いないし遊ばれたかぁ、みたいな感じだったから気にしてないし、元気出してよ。――んで、どうする？」

6

自己嫌悪で消えてなくなりたい卓哉の心境とは対照的な明るい慰めが卓哉の上に投げ掛けられ、頭を抱えていた卓哉は顔をあげる。ミナは水を手に一息つくと、　打って変わって真剣な眼差しを見せていた。いつの間にか、ミナの前に置かれていたパスタはミナの胃に収まっていた。一方、話を聞くのに集中していた卓哉の　方はほとんど中身が減ってやいなかった。

「私は高校生じゃないし、避妊もちゃんとしてたから卓哉君が取るべき責任って奴はないけど、私と結婚してくれる？」

　言われて卓哉は言葉に詰まった。ミナが大学生と知って以来考えないようにしていたことを口に出されたからだ。口がからからに渇いた気がする。水の入ったグラスに手を伸ばして中の澄んだ液体を飲み込むと少し心中に落ち着きが戻ってきた。

　結婚云々は自分でも先ほど口にしたことではあるのだが、必要性に駆られていない今、卓哉は諾と返すことに抵抗があった。

「いや、俺達お互いのこと知らないじゃないか」

　何とかそう口に出すと、ミナは首をふるふると横に振った。

「私は知ってるよ？　自己紹介ちゃんとしたもん。山田卓哉、二十二歳。職業は国語教師。仕事は好きだけど、慣れない環境で四苦八苦してる。趣味は読書。結構無　節操に本に手をつけるけど、文学賞取った奴は絶対読む。あと専門書や実学系には興味がない。今付き合ってる彼女はいなくて、交際相手に求めるのは癒し」

　指折り数えながらつらつらつらと淀みなくあげられたプロフィールに、卓哉は口を閉ざさざるを得なかった。酔っていたから、とミナは言うが、酔っていてもミナは誠実に卓哉に向き合っていたのだろう。だからこそ、口で一通り述べただけだろう細かいところまできちんと覚えている。

「私は酔ってたけど、この人と結婚してもいいなって思ったのは本

心。ま、いきなり結婚って言うのは確かにちょっと、って思うけど。単に付き合うくらいはいいじゃない？　私が女に思えないからってフるのはありだけど、私を知らないからってフるのは許せないな」

ミナは酔っ払っていたとはいえきちんと卓哉と交わした約束を忘れないで覚えている。それに対して全てを酒が抜けると共に忘却してしまった挙げ句、そんな真摯に対応しようとしてくれた相手をホテルに一人残すような真似をする自分の不誠実さに己の矮小性を見出し、卓哉はそれを恥じた。

酔っていようが結婚の申し出をしたらしいし、彼女の年齢ならば何も犯罪ではない。結婚でもなく交際を断る理由が果たして明示できるか。

「ね、まずは恋人から始めてみない？　まずは私を知ってよ、卓哉君」

——否だ。

卓哉はこれ以上ミナの言葉を拒むほどの人で無しではないつもりだったし、ちょうど明日からは黄金週間で、その間の予定もない。お互いを知る時間は十分にありそうだ。

卓哉に残された返答は諾でもう決まったも同然だった。

まずは伸びてしまって美味しくないかもしれないパスタを食しながら、ミナの自己紹介を聞こう。

そんなことを考えながら、卓哉は口を開いた。

6（後書き）

卓哉とミナの話はここで一旦終わりです。
次はストーカー気質の人の話、のはず？

1 （前書き）

一目惚れした人に付き纏う女と、それに振り回される友の話。
友人による騒動記。

1

——ミナ、私ね。好きな人が出来たんだ。

ありきたりな文句から始まる告白は、

——それでね、その人に会ってほしいの。あ、好きになっちゃダメだからね！　私が絶対手に入れるんだから。運命の人なの、私と結ばれるのがもう決まってるの。

——あのさ、私彼氏いるからね？

よくぞ一息でここまで、というほどの長文だった。それを語られても美奈子が平然としていられたのは、もう長い付き合いだからある程度は耐性がついていると　いうのが大きいだろう。美奈子の脳裏には、そもそも運命なら誰が手を出そうがうまくいくのでは、などという考えも過ぎったが、それを口にするような愚行を　冒さないだけの分別も美奈子にはついていた。一度それを口にしたら恐ろしい勢いで言い募られるのは目に見えている。

その日、友人の紗耶香に呼び出され、美奈子は渋々先約をキャンセルし紗耶香に応じた。本来ならば彼氏とのデートでの待ち合わせ場所だったはずの駅前に立っているという虚しさに、美奈子は必死で気づかない振りをした。

ここ二月、美奈子は確かに出来たばかりの彼氏との時間を優先してしまい、つい旧知の友人との時間をなおざりにしてしまっていた。何しろ最後にまともに友人と時間を過ごしたのはもう二月も前、それこそ美奈子が彼と出会う前にまで遡ってしまうのだ。

その日以来全ての予定を美奈子は彼氏を理由に断り続けてしまったのだから、この辺りで一度紗耶香の機嫌を取った方がよかろう。そういったわけで今日は紗耶香を優先したのだが。

「おかえりなさいませ、ご主人様！　お嬢様！」

可愛らしい声と姿、そして異様なムードに出迎えられ、美奈子は心の底からその選択を後悔していた。

「今日のオススメはお日様オムライスですぅ！」
六月ももう終わり。まだ梅雨こそ明けないが、肌寒さとは既に掛け離れ暑ささえ覚えるその頃。友人と出掛けるのなら夏休みに行くプールや海のための水着を買いに行くのだろう、と考えていた美奈子は、冒頭の台詞を言い放った紗耶香に連れられ何故かメイド喫茶に来ていた。
平然とメイドの後ろ姿について歩く紗耶香を見ながら、美奈子は想定と丸きり違うこの訳の分からない状況を理解しようと必死に思考を巡らせていた。
「私はそれと魔女のコーヒーで。ミナは？」
「わ、私？　――ミルクティー一つ」
その間にも状況は進んでいく。当たり前のようにオーダーさえしてしまう紗耶香に、美奈子は紗耶香がここに通い詰めていることを察して頭を抱えたくなった。メイドににこりと微笑まれ、頬を引き攣らせつつ、メニューも見ずに無難な選択を告げる。
メイドが去っていく後ろ姿を見送りながら、美奈子は必死に考えを巡らせた。
確か美奈子は紗耶香の好きな人を見せに来られたはずだが、それが何故メイド喫茶？　普通に考えればそこに紗耶香の好きな人がいるということになるが、だと　すれば候補に上がるのはメイド喫茶に通う男、メイド喫茶で働く男、大穴でメイド喫茶で働く女。どれにしても美奈子には微妙な相手に思えた。
やっ　ぱり、彼氏を優先すべきだったのだ、と美奈子はこの場にいない彼氏に詫びた。何が悲しくて恋人とのデートが、メイド喫茶行きになってしまったのだろう。本　来ならば、毎週金曜が定休の彼氏と映画を見に行くはずだったのに。流行りのアクションものは彼氏のリクエストだったのだ。
「変に罪悪感を持ったりしなきゃよかったよ」
はぁ、と美奈子は溜息をついて我が身の不幸を嘆いた。

2

美奈子にそんなことを思われているなど知りもせず、紗耶香はきょろきょろと周囲を見回した。紗耶香の探している人物は目を引くので、そう狭くない店内でもすぐにその姿が目に入る。

「アヤ！」

紗耶香が声をあげると、声に反応してその人の視線がこちらに向く。それから紗耶香の傍へとやってきてくれるのがアヤだ。このアヤが紗耶香の好きな人だった。

執事服に身を包んだ容姿は、かっこいいというよりは麗しいと形容したくなるようなそれだ。そこに気品ある所作も相俟って、アヤはまさに王子様のようだった。逞しさこそないが、その柔らかい所作にはレディーファーストの精神が溢れているのだ。

そんなアヤの手を掴み、紗耶香はいつものようにアヤに言葉を投げ掛ける。

「アヤ！　私今日も来たのよ、アヤのことこんなに愛してるのに、アヤったらまだ私のこと試すの？」

「ちょっと紗耶香、」

美奈子の焦った声が耳に届きはしたが、紗耶香は敢えてそれを無視した。

街中でメイドと共にこの喫茶の客引き紛いのことをしていたアヤを、一目見て紗耶香は視線が離せなくなった。紗耶香はそれがすぐに俗にいう一目惚れだと気がついた。

己が人より惚れっぽい性質であることは自覚していたが、流石に一目惚れは紗耶香でも初めてだった。一目見て恋に落ちるなど、まさに運命というものに違いないと思ったのが一月前。

この運命、絶対に逃してなるものか。

そうして紗耶香は毎日こうしてアヤの許に現れ告白しているのだが、恥ずかしがっているのかなかなかアヤはうんと言ってくれない。

結局、紗耶香が知っているのはアヤという名前のみ。それだって執事服の胸元のシンプルなネームプレートに印刷された字を読んだだけ。本名や住所、年齢、果ては普段どこで何しているのか。そんなことさえ紗耶香は教えてもらえない。

とはいえ、紗耶香は自分が嫌われているだとかそういうふうには思わなかった。何といってもアヤは紗耶香が呼べば来てくれるのだ。客商売だから当たり前なのだが、紗耶香はそうは思っていない。

「すみませんがお嬢様、私は給仕ではありませんのでお客様にお付きすることは出来ません」

困った顔をして紗耶香に告げるアヤの仕事は、本人の申告通り給仕ではない。女の子ばかりのこの店で不埒なことを目論む客から女の子を守るというボディーガードとしてアヤは雇われている。

そこも紗耶香がアヤを魅力的に思う要因の一つだ。女の子を守る王子様、なんて女の子の夢を具現化したその人に恋をしない方がおかしい。

「もう！　私はただアヤに会いたくて来てるだ」

「お嬢様、お日様オムライスと魔女のコーヒー、ラクダのミルクティーお持ちしましたぁ」

とそのとき背後から声がし、紗耶香は顔をしかめた。振り返れば案の定、思い浮かべた通りの人物がそこにいる。盆に乗せられたオムライスと飲み物をテーブルに置きながら、そのメイドは茶化した調子で紗耶香に言う。

「お嬢様、アヤ君にちょっかい出さないで下さいよぅ」

唇に人差し指を宛てがい、首を傾げて見せたメイドに、周囲の客がどっと湧いた。だが、きゅるん、と訳の分からぬ効果音さえ聞こえそうなそのメイドの所作　は、紗耶香の気分を害するばかりだ。そんな中でそのメイドが周囲の男達に笑顔で手を振り応えるものだから、余計に紗耶香の機嫌は悪化する。

3

紗耶香はこのメイドが大嫌いだった。天真爛漫な笑みと愛らしい容姿は確かにそのメイド服とよく似合っていたが、それだけだ。一々紗耶香がアヤに話し掛ける度邪魔をするように姿を見せる様など、紗耶香に対する悪意が透けて見える。

本人の性格には可愛らしさなどかけらもなく紗耶香はそれに憎々しさすら覚えており、坊主憎けりゃ袈裟まで憎いという言葉の通り、わざと出しているような声音も嫌いだったし、果ては『ゆん』と丸文字で書かれたネームプレートですら紗耶香には腹立たしく思えてならなかった。

ただでさえ悪感情を抱いている相手から、なかなかアヤに振り向いてもらえなくて苛立っているときにそんなことを言われては、紗耶香の怒りのバロメーターが振り切れても仕方がなかった。

「あんたに関係ないでしょ」

「ちょっと紗耶香！　お店の人だよ！」

美奈子に窘められるが、紗耶香は怒りのままに、煩い、とそれを一刀両断にした。今日は何と言われようともゆんと戦うべきときだった。

ゆんの存在はいい加減紗耶香にとって目障りだった。このままではいつまでもアヤに対するアプローチは成功しないだろう。今日こそ何か言ってやらなければ、と紗耶香は思ったのだ。

今日美奈子を連れてきたのも、勿論美奈子にアヤを見せたかったのもあったが、ゆんの相手を美奈子にしてほしかったのも否定しきれない。友人の恋のためだか　らと協力してくれるかと思ったが、美奈子はおろおろして紗耶香を諌めてすら来る始末で、何一つ思い通りにならない紗耶香は苛々してゆんに声をあげようとした。

だがそれより先に、別の声が上がる。

「お嬢様！　いい加減にして下さい！　こちらには迷惑なんです」

紗耶香は初めそれが何か悪い夢、或いは空耳の一種だと思った。だが、ゆんを庇うようにして立つアヤの表情から確かにそれがアヤの発した言葉だと知るや、紗耶香は言われた内容を理解して蒼白になった。

その言葉は紗耶香に大ダメージだった。何せそれは紗耶香の求愛を全て否定する言葉だからだ。

「う、そ……」

「本当です。しかも私だけならまだしも、他の店員にまで迷惑をかけるような物言いはやめて下さい。仕事の邪魔でしかありません」

いつも困った顔で紗耶香をひらりとかわすその人の直接的かつきつい物言いに、紗耶香は顔をくしゃりと歪ませる。アヤがそんなきつい言い方をする人だとは知らなかったし、そんなふうに思われているとも紗耶香は知らなかった。しかも、アヤは紗耶香ではなく、ゆんを庇ったのだ。それが紗耶香にはショックだった。

だってアヤは紗耶香の運命の相手ではないのか。いいや、違う。運命の相手ならばこんなに酷いことを言ったりしないのに違いない。ということは、紗耶香はこの酷い人に騙されたのだ。

周囲の客も温厚なアヤが珍しくキレるところを見て、紗耶香は自身が注目を浴びていることに気がつくと恐慌状態になり、逃げるようにその場を去ることしかできなかった。

4

意気消沈してしまった紗耶香を追い掛けるように、美奈子も喫茶を追って出た。というよりは出ざるを得なかった。こちらに向けられる興味本位の眼差しは美奈子一人で堪えられるものではなかったからだ。そのままどこか落ちつける場所へ、と考えて紗耶香を喫茶店に連れ込んだ美奈子は正面に視線を向ける。

紗耶香は呆然としており見ていて気の毒なくらいだったが、しかし美奈子はかける言葉が見つからなかった。何しろ何度か美奈子とて見て知っているが、恋愛に関わる紗耶香の言動には目に余るものがある、と常日頃から思えてしまっていたからだ。

紗耶香は恋愛さえ絡まなければいい人間なのだが、恋愛に燃やす情熱は美奈子からすれば引いてしまうほどに凄まじい。

だからいつも以上に熱烈な紗耶香の求愛に、いい加減相手も迷惑を覚えたのだとしたら、至極自然な流れだった。寧ろはっきりと迷惑と言いきったアヤの言葉には、少し胸のすく思いすらしてしまったくらいだ。

美奈子はちらりと視線を隣にやる。相変わらず言葉を発するのすら億劫とばかりに虚ろな目でどこか遠くを見ている紗耶香の様子に、アヤからの拒絶が相当衝撃だったことが察せられる。勿論ここまで悄然としてしまった友人を見れば流石に可哀相に思いつつ、かといって全面的な味方もできず。

とうとう何もフォロー出来ずに別れた週明け。今度こそかけるべき言葉を見つけねばならず、だが下手な言葉をかけて増長させるのもよくない、と悩む美奈子を嘲笑うように、切り替えの早い紗耶香は既に次の恋の相手にターゲットをシフトさせていた。

全く学習することなく恋に燃え上がる紗耶香のバイタリティとタフさに、美奈子は何となく土日の間ひたすら悩んでしまったことにがっくりときたのだった。どうやら衆人環視の中であそこまで言わ

れたことですぐさまアヤに幻滅したらしい紗耶香には、最早苦笑するしかない。

この数日間ひたすらに紗耶香に振り回されるだけだった美奈子は、一つ決心を新たにした。やっぱり、この友人より彼氏を優先すべきだったのだ、と。

ひとまず彼氏との次の金曜の予定を合わせるため、美奈子は携帯を開きアドレス帳の、『た』のところから目的とする名前を探し始めたのだった。

4（後書き）

ここで美奈子と紗耶香の話はお終いです。紗耶香の話はいずれ回収するとして、続きがかけてないのでこっちの更新暫く止まります。

1（前書き）

女装少年と、男に間違われる女の子のもやもやの話。

1

「あ、そこのお兄さぁん、」
そう呼び止められ、綾は声の主を振り返った。可愛らしいメイド服姿の人影が綾の許へとことこ歩いてきて、綾はその人物に呼び止められたのだと悟る。
綾のごく近くまでやってきたメイドは小首を傾げながら、綾に問い掛けを発する。近場で見れば見るほどかなり見目好いその顔立ちに、綾はしかしあることに気がついて複雑な表情をした。
「お兄さん、今時間あったらうちのお店に来てくれませんかぁ？　六月はお店のメイドも衣更えで夏服にチェンジしたんですよぉ」
とても可愛らしいその仕種に、通り掛かる男性の幾人かがそのメイドに視線をやっていたが、綾にはそのメイドが可愛いことは何の意味も持たない。綾を羨ましげに見つめて来る幾つかの視線も、綾は黙殺した。
結局綾は周囲とは異なりただそのメイドに一言だけ言って素通りを試みる。一瞬の隙をつけるよう、先程気付いた一つの真実を突き付けながら。
綾は今急いでいるのだ。買い物をしてさっさと帰りたい。綾の兄弟は帰宅が早いくせに綾に食事の準備を丸投げするものだから、兄弟の食事は綾に一存されているのだ。特に弟は食べ盛りだからとごちゃごちゃ煩い。綾だって大学生なのだから全く暇ではないのだが。だからこんなところでこんなものに引っ掛かっている暇はないのだ。
「生憎時間はないし私はお姉さんだ、少年」
さのまま相手が凍りついている間に通り過ぎようとした綾だが、しかしそれをする前に腕を掴まれ、前につんのめる。まだ何か用があるのか、と声をあげようとした綾は満面の笑みを浮かべるメイドに嫌な汗が頬を伝うのを感じた。

「すごいねお姉さん、どうして分かったの？」
先程の甘ったるい間延びした口調と声音をきっぱりとやめて、メイドは綾に問い掛けて来る。
きらきらと輝くその目は知られたくないことを知られた怨みなどがあるわけではなさそうだったが、今早くこの場を去りたい綾には迷惑なことに変わりはない。
どうやら綾は要らないことを言って、その少年にロックオンされたらしかった。

俊の趣味を敢えてあげるとするならば、それは演劇だろう。とはいえ、俊は演劇を見ることが好きなのではない。自分ではない誰かを演じること——文字通り、演劇が好きなのだ。
自分ではない誰かを完璧に演じきることができ、そこでは誰もが自分を知らない。自己逃避にも似た心持ちで、俊は自分でない誰かを演じる。
そして、今俊が演じているのが、メイドだった。別に女になりたいわけでも男が好きなわけでもない。ただ、自分でないものの候補として異性というのはその極みというべきものだろう。
メイド喫茶に女子として雇ってもらい男に愛想を振り撒いて、男がこちらにときめく度俊は達成感を覚えた。
お前達が熱心に見ているのは男だ、と突き付けてやったときの相手の絶望を想像しながら俊はただひたすら仕事に勤しんだ。その間、誰も俊が男だと気づかなかったのに。
たまたま客引きで声をかけただけであったのに今俊の前にいる人物に俊はあっさりとその正体を見破られた。その人が女であるというのも驚きだったが、彼女に正体を見破られたことが俊は驚くと共に気味よく思ったのだ。
一目見ただけで何故ばれたのか。それだけでその女に対する興味が湧いた。どうしてばれたのかが分かれば今後の参考になるだろう。

「ごめんごめんお姉さん、んでどうして分かったの？」
「……私は急いでいるんだが」
聞けば少し低めだが、女性の範囲を出ない声に俊はなるほど、と彼女が女性であることに納得した。それから彼女をよく観察する。
短い黒髪と涼しげな目元から優男のようにも見える容姿は、宝塚にでも重宝されそうだ。甘めの顔立ちの俊には望んでも得られないそれを、物欲しげに見てしまってから、俊ははっ、と我に返る。
「じゃあ連絡先教えて？　俺から連絡入れるから。今後の女装の参考にしたいんだ」
「……そのくらいなら」
飽くまで俺は男で相手は女。下心ありと判断されてはやりづらい。だが幸いにして、俊の容姿は男性的ではない。どちらかといえば女性的とさえ言える。その容姿は相手に警戒を抱かせにくいだろう。
出来るだけ無邪気さを装って携帯を差し出せば、俊の目前の女は渋々といった様子で自身の携帯を取り出した。赤外線でプロフィールデータを送信しあい、携帯に表示された名前を確認する。
佐野綾。表示された名前に、彼女の名を知る。綾ににこりと微笑んで、ばいばいと手を振ると毒気を抜かれたのか呆れたような顔をしながらも綾は俊に手を振り返してくれた。
「意外に可愛い……」
きり、とした美人なのにひらひらと手を振り返すなどしてくれるその様子に、容姿と中身のギャップを見出だして俊は思わずそう呟いていた。
綾に声をかけたのは本当にただ俊の正体に気がついたからだけだというのに、やばい。嵌まりそうだ。
こんなに俊の気を引くことのできる彼女が是非欲しい、と俊は決意した。

1（後書き）

書き終わるめどが立ったので。

2

外はしとしとと雨が降ってじめじめとしているが、室内は多少むしむしする程度でまだ冷房をつけなくてもそこまで悪環境ではなかった。しかし、梅雨が明ければ夏がやってくる。昨今の夏は異様に気温が高いので、今年もきっと冷房も使わざるを得ないだろう。

そんなことを考えながら、俊はベッドに寝転がった。仕事上がりで疲れた体に心地よい眠気が広がるが、しかしまだ寝るわけにはいかない。俊はうつ伏せに転がり、携帯を取り出してメールの送信画面を起動する。

勿論綾に送るメールを早速したためるためだが、何と言えば警戒心を持たれることなく自然な接触がもてるのか。俊はそれを考えるのに腐心する。

普段俊は女性に苦労したりしない。それは可愛いと評される容姿を全力で利用するからだし今回もそうするつもりだが、綾は俊に話し掛けられて迷惑に思っていることを全面に押し出してきていた女性だ。だからこそ、下手に接触すれば露骨に嫌がられ、避けられそうだった。

『永井です。佐野さん、明日暇ですか?』

うーん、却下だ。いきなり予定を聞いたりしては警戒されるだろう。メールを受信拒否されたりしたら、もう連絡の取りようがない。こういうのは掴みが肝心なのだ。もっと相手を持ち上げなければ。

大体にして女装のことを聞きたいと伝えてあるのだから、そちらを押して行けばいいのだ。

『佐野さん、異性装の極意を教えてください。』

いや、一人称も私だったし綾は多分男装していたわけではないような気がする。ぱっと見男性と見間違ってしまう容姿の持ち主とはいえ、それで男に見えるような言い方をされるのは、心外に思うかもしれない。

『今日アドレスを交換した永井です。佐野さん、俺の女装どうして分かったんですか？』
結局打ち込んだ文面はかなりシンプルなものだった。しかもつい敬語になってしまっている。だが、下手に馴れ馴れしいと嫌がられるよりはマシだろう。
何度も読み直した後に送信してから、返事が来るまでの間ごろごろと無意味にベッドの上に転がっては携帯に着信がないか確認する。
勿論すぐに返事があるはずもなく、携帯は沈黙を保ったままだ。俊はそれを確認してはこの上なくがっかりした。
返事が余りにもないので気分転換も兼ね携帯は部屋に置いて、仕方がなしに風呂に入る。風呂から出てリビングを通ると、いつも見ているバラエティー番組を家族が見ていたのでつい一緒になって見始めてしまった。
それから部屋に戻ると俊の携帯は暗がりの中でその存在を主張しており、すっかりメールのことを忘れていた俊は慌ててメールを確認した。
佐野綾、と差出人名が表示された画面に、俊は頭を抱えた。着信時間は俊が風呂に入ってすぐの頃。もう少し辛抱強く待っていればすぐに着信が確認できたろうに、もうメールが届いてから優に一時間は過ぎてしまっている。
いや、逆に考えればいい。綾からのメールにあまり早く返信しては引かれたかもしれない。初回の返信としては、ちょうどいいくらいの時間なのかもしれない。
慌ててメールを開けば、そこに表示されているのはシンプルな一文。
『直感ですかね。女じゃないんじゃ、と思って見たら、全部胡散臭い感じがしました』
遠慮も何もいっそ小気味よいくらいに何もない文面に、俊は吹き出した。綾から全く意識されていないのがよく伝わってきたからだ。こんなに意識されていないのならば、それを利用させてもらおう。

多少強引でもこのスタンスを押して行けば、約束は楽に取れそうだ。
『特にどこを直したらいいですかね？』
『ぱっと見ただけですしよく覚えてないです』
『じゃあ実際に見て教えて下さい。今度の日曜とか暇ですか？』
メールを送信して、待つ。今度は五分程度で返信があった。
『暇ですけど、夕飯作るので遅い時間は困ります』
さらりと条件を付けられたが、そんなことで俊は怯むわけではない。それを逆手にとって文面を入力していく。
『じゃあ昼を一緒にどうですか』
『まぁそれなら』
芳しい返事を得られ、俊は満足そうに笑った。

綾は正面にいる生き物を見ながら変なことになった、と思った。綾の視線を感じてにこり、と笑い返してくれるその人は綾が着られないような可愛らしいワンピースを身につけているが、その実中身はいくら容姿が女性的だろうとれっきとした男だ。
つい先日、綾に声をかけてきたメイド服男子に、気がつけばアドレス交換などさせられた。そしてその日のうちにメールがあり、綾と昼を食べたいとの申し出に、まさかナンパかと綾の脳内が一瞬警報を鳴らす。
結局相手が女装していることと、綾自身に声をかけて来る男など今までいなかったことからそれを打ち消して綾は出てきたわけだが。
綾は周囲をちらと見た。梅雨であるが珍しく晴れた空に、街中を歩く人の姿は多い。そして、周囲の視線は全て俊に向いていた。普段から男として見られがちな綾だが、それでも男に負けると地味に女としてのプライドを傷つけられる。
綾が男に間違われる原因はその外見だ。中性的な顔立ちに凹凸に欠けた体つき、すらりと伸びた背、短い髪にボーイッシュな服ばかりを好んで着るせいなのは分かっているが、フェミニンなものは似

合わないので似合うものばかりを選ぶとこうなる、というわけだ。
「それで綾さん、俺の恰好の何が悪いか分かった？」
俊に聞かれ、綾は首を傾げる。今日の俊の女装もぱっと見何も問題なさそうなのだが、何だか妙に引っ掛かるのだ。その違和感が果たしてどこから来るのかが分からず、綾はうーん、と唸った。しかしいくら考えたところで結論が出るわけもなく、綾は早々に思考を放棄した。
「悪いがよく分からない」
「そっか。じゃあ仕草とかが悪かったのかな？」
俊の方も綾の答えに少しがっかりした様子を見せながらも、そう言ってくれるので、綾は少し笑んで有り難くそれを肯定した。
「かもしれないな」
そこでもう会話は終わりだろうと綾は思っていたのだが、そうは問屋が卸さなかった。
「じゃあ綾さん、俺の仕草が変じゃないか見張ってて」
「——はっ？」
言われた内容が理解しがたいものだったために綾は声をあげたが、俊は当然とばかり平然としている。
「だってそれが一番いいでしょ？　見てたら何がおかしいか分かるし。うん、うちのメイド喫茶でバイトしてよ。名案じゃない？」
「はっ？　っていうか私はメイド服とか似合わな」
「じゃあ」
勝手にバイトを決められそうになり、疑問符をあげた綾の言葉を遮るように、俊が口を挟む。何を言われるのかと身構えた綾に、俊はにこりとその言葉を告げた。
「執事でいいじゃない？」

2（後書き）

そういえば。

綾は大学生で、俊はフリーターです。

学年は決めていないけれど、とりあえず二人とも紗耶香より年下。

3

そうして何がなんだかよく分からないうちに押し切られ、綾はメイド喫茶でバイトすることになっていた。自分でもこれはあまりに押しに弱すぎるだろう、と呆れてしまうばかりの事態である。

　綾は己を見下ろす。俊の提言を受け入れ、綾に支給されたのはシンプルな執事服だ。ごてごてした装飾もない。ふりふりのメイド服を着た給仕でないことだけが救いだが、それでも綾からすれば恥ずかしいことこの上なかった。今でも身につけるのに抵抗感はかなりあったが、それでもそれなりに日数を重ねて少しだけ慣れてしまった自分が悲しい。

「あや！　今日も会いに来たよぉ！」

　しかも、恰好のせいで男だと思われてしまい、客から交際を求められるようになってしまったのだ。日々通い詰めてくれる彼女達（複数形）に、綾は引き攣りそうになる口の端を何とか笑みの形に結ぶことしか出来ない。接客業で顰め面などとんでもない、と店長に耳だこになるほど言い聞かされている。

「すみませんがお嬢様、私は給仕ではありません」

　綾に与えられたのは確かに執事服だが、綾が要求されているのは執事として客に奉仕することではない。別にやりたいのならいいのよ、と店長は笑っていたが、綾は丁重にお断りした。

　そんな綾に与えられたのは一応店が女の子だけだと何かと心配だから、と要するにボディーガードまがいの役割らしいのだが、綾も女なので見かけ倒しだ。実際に何かとあれば何も出来ない。店長も、ほら監視カメラがあるだけで犯罪が減るって言うでしょ、それとおんなじよ、と言っていたので綾はこれは防犯だ、と自分に言い聞かせることにした。

　そういうわけで、そこまで高度な接客は求められていないものの、女性客に求められたときには多少の会話に興じるくらいのことはし

なければならないし、料理だってメイドが指名されていないときは綾が運ぶこともある。
「お堅いなぁ、あやは。でも諦めないからっ！」
言いながら出ていく客を見送りながら、今日の客は物分かりがよくて助かった、と一息つく。中にはなかなか帰ってくれない客もいることを思えば、かなり楽な部類の客だ。
ふぅ、とため息をついて綾は悩む。アルバイトをしたことがない綾にとってこれは将来的にいい経験にはなるのだろうが、同性に迫られるのはあまり楽しい気分ではない。
客相手に自分が女性と打ち明けるのも夢を壊してしまってあまりよくないだろう、というのもある。だが、まず他のメイドから綾が男と思われているのが問題だった。
俊の紹介で入ったと紹介されたとき、俊は女装だとかそういうことを他のメイドには伝えていなかったらしい。今もなお伝えておらず、ばれる恐れもないそうだ。
その俊に、もしかして恋人なのかとメイドの一人が問い掛け、俊がそれを面白半分に肯定するものだから、綾も自分が女だと言い出せなくなってしまった。流石に同性愛者と思われるのは――実際のところどうかは知らないし、女装癖がばれるのとどちらがマシかも怪しいところだが――不憫に思われた。
うまくのせられていると思いつつも、仕事自体はなかなか面白い。勿論仕事であるからして多少大変なことや嫌なこともあるが、仕事を辞めたいほどのことではない。
要するに現状を甘受してしまえる範疇なわけで。結局気づけば既にアルバイトを始めてから丸一月が経ってしまっている。
やり場のないもどかしさは、結果としてこんなことになった元凶にぶつけるしかなくなる。綾は何やら少し離れたところで客と談笑している男にじと目を向けた。
「ゆんちゃん、ほら。俺こんなにゆんちゃんのこと愛しちゃってるよ？」

「いやだぁご主人様ぁ、ゆん嬉しい！」
「ふへへ、それほどでも」
いやでも耳に入ってくる楽しげな笑い声すら、綾の苛立ちを煽るばかりだ。それを強引にシャットダウンしながら、綾は内心で俊を詰る。
こちらが女装がばれると可哀相だからと気を利かしているのに、当の本人は全く楽しそうだとか、不公平ではなかろうか。男だとばれて困るのは俊の方ではないか。
客も客だ。確かに身に纏っている服こそメイド服だが、どう見ても男ではないか。それに気が付かずにデレデレしているだなど。それなら傍にいるのは自分の方が余程――。
そう思うことがどういうことを意味するのかに気付かずに。綾はちらちらと俊の方を窺いつつ苛々と仕事をこなしていた。

4

そろそろ相手にするのも飽きてきたんだけどなぁ。
客ににこやかに対応しながら、俊はその笑顔の裏で相手の男にキレたくなるのを懸命に堪えていた。
綾を手に入れたい、と決めて連絡を取ってからこちら、俊はたゆまぬ努力を重ねてきた。会話のどさくさにまぎれて綾を名前呼びすることにも成功したし、知略を駆使して、綾と頻繁に顔を合わせる仲にもなった。
仕事場の同僚達に綾が俊の恋人だと誤解されたのも、大正解だった。煩い客が何人か綾についてしまったのは思いがけなかったが、同性だからそれ以上関係が進むこともないだろう。そう思えば俊はそれを仕方がない、と寛容に受け入れることができた。
俊と綾の間に同僚達は誰も入り込んでこないし、客も入り込む余地がない。これでゆっくり俊が綾にモーションをかけていくだけの時間が得られる。そう考えたのは間違いではなかったはずだ。
なのだが、受け入れがたかったのはとある事実。仕事中は客に絡まれて、俊が綾と話す機会がほとんどないということだった。綾も綾で時々入る女性客に人気なものだから、俊の手が空いても今度は綾が空いていなかったりする。
その上、綾は仕事を上がるのも早い。そのせいで既に一月は経ったというのに、定期的に顔を合わせることはできても、ろくに私的な会話をすることは叶わなかった。
表面だけはにこやかに、しかし内心では苛立ちを抱えて客に応対する俊に、客が付け上がったのか不埒な手で触れようとしてくる。ろくでもない客だったらしい。外れだ。
女性として男を騙すのは楽しくとも、同性愛者でもない俊は男に触れられても不愉快窮まりないだけだ。いい加減キレそうになった俊だが、しかし俊が手を出すより先に横から手が伸び男の手を掴む。

「え？」
「ご主人様、申し訳ございませんがメイドに手を出すのは当店の決まりで禁止となっております」
　無表情で淡々と言い切る綾に、客はしまった、という顔をしつつも気分を害したのを隠そうともせず暴言を吐く。
「執事か何かのくせに僕に文句を言っていいと思っているのか！」
「当店の決まりですので」
　怒りをぶつけられても淡々とそれだけを言う綾に、客は音を立てて椅子から立ち上がると台無しだ、と言い捨てて店を飛び出す。身勝手窮まりない行動に俊が呆れていると、綾がイライラした声でぼそりと呟いた。
「どう見ても男にしか見えないあなたに迫る変態もいるものなんだ」
　何故綾がそんなことを言い出すのか俊にはさっぱり分からない。だが、言っている内容だけ聞けば嫉妬でもしたかのようだ、なんて自分に都合のいい解釈をしてしまいそうになり、俊は慌てて頭を振ってその考えを何とか脳から追い出した。
　綾には全く迫れていないのだから、良くも悪くも自分が異性として認識されている可能性は低い。しかし職場が同じなのだからいくらでも方法はあるはずだ、と弱気になりそうな心に今までも何度も活を入れてきた。
　今そう認識されていなかろうと、最終的に認識されればいいのだから今下手に動いて全てを台無しにするな、とついこのまま都合のいい考えに縋りたくなる自分を叱る。
　さて、綾に何と返せばいいのか。俊は彩の発言のせいで混乱する頭で必死に考えるも、なかなか考えは纏まらない。結局俊が頭に思い浮かんだものは。
「何？　もしかして綾さん嫉妬した？」
　あっさりと否定されること前提でそれを口にしたのだが、綾の反応は俊の予想から外れていた。
「……。……っ！」

初めぽかんとした様子を見せておいて、それから何やら考え込んだ末かああ、とりんごかと思うほどに真っ赤になる綾の反応に、俊は面食らった。

こちらから何もモーションをかけられてもいないのに、何だその反応は。そんな反応をされると図星なのでは、と――本当に綾が俊のことを好いてくれてしまっているのでは、と期待してしまうではないか。勘違いだと俊の中の冷静な部分がきつく言い聞かせてくるが、とてもそうだとは思えなかった。

二人は暫くそのままの体勢で動かずただ互いを見つめあっていた。

これをきっかけに二人が付き合い始めるのはもうすぐだが。

綾が初めから自分が俊のことを男と認識できていたのが、彼の中に男を見出していたからだ、ということに二人が気がつくのは、まだ当分先のことである。

4（後書き）

ここで俊と綾の話はおしまいです。
次の話のめどがついたらまた更新します。

1

夏が始まろうという季節、一人の少女が道を歩いていた。背中に背負うはリュックサック、中には彼女の愛する本達がたくさん入っている。それの重みに少女はふぅ、と溜め息をついた。
期末試験――つまりは学年末が近づいた今日、そろそろ学校のロッカーに入っているものを持って帰らなければならない。これは置き勉等をする生徒の宿命であり、また彼女も例に漏れずロッカーの愛用者だった。ただし、ロッカーの中身は主に教科書ではない書籍だったが。
何から持ち帰るか考えた末、彼女は愛読書の救出から始めたのだが、この重さには辟易してしまう。しかも、まだ学校のロッカーにはこれ以上の冊数の本がところ狭しと納められているのだ。ということは、あと数日間彼女はこの大荷物を持ち運ぶことになる。
はぁ、と俯き何度目かの溜め息をついて、顔を正面に戻したそのときだった。
ほんのすぐ先にいる二人連れの人物に、少女は目線を奪われる。ただ仲のいい男性二人が歩いているようにも見えるその光景だが、しかし彼女はその二人が手を繋いで、いや、ただ繋ぐだけではなく指を絡めあっていることに敏感に気がついていた。
二人は少女から離れるように角を曲がってしまったためすぐに姿は見えなくなったが、彼女は雷に打たれでもしたように暫くの間動くことも出来ずに彼等を見送った。
リュックサックはまだ彼女の背中で自身の重さを精一杯主張していたが、今や彼女はその重みも気にならなかった。
今見たばかりの二人連れのうち、片方の顔を思い起こす。毎日学校で見ている顔によく似た顔立ちがあったような。
クラスメイトの顔を順に思い出していくと、該当する人物は最後の方で思い付いた。

「……あれは、隼人君のお兄さん、とか？」
クラスメイトで隼人、と友人達から呼称されている少年を思い出す。多少挨拶や無難な会話をするだけの関係で、相手のことはよく知らない。
流石に苗字は思い出すことが出来なかったが、声をかけるために必要なのは名前だけだ。名前で呼び掛ければいいまで。
先程までの憂鬱さなど吹き飛んだ顔で少女はそっか隼人君か、と呟き――笑った。

「隼人君のお兄さんって男の人が好きなの？」
隼人はその言葉に、はっ？　と読んでいた本から顔をあげた。隼人のクラスメイトである柳玲子が、にこにこと笑みを浮かべてすぐ傍に立っている。
昼休みの教室は閑散としており、テスト前だというのに焦るような空気はどこにもない。隼人も多分に漏れず、のんびりと読書に勤しんでいたところでの呼び掛けだ。
柳玲子は隼人のクラスメイトで、かなりの美人だがそれを鼻にかけたりはせず気さくなタイプだ。密かに隼人がいいなぁ、と想っている女子でもあった。
とはいえ隼人はそこまで恋愛に積極的なわけでもなく、時々事務連絡を話す程度。簡単なプロフィールを除けば、ろくに互いのことは知らないといっていいだろう。このまま何事もなく卒業して、淡い青春の思い出として何年か後にしんみり思い出す程度だろうと思っていた。
だから、こんな風に私的なことについて言葉を交わしたことはそれまでなかった。
返答しない隼人に、柳玲子はそれを否定と取ったのか、隼人の前で首を傾げて見せる。さらりと前髪が揺れるその動きがやけに隼人の目についた。

「違うの？　この間隼人君に似た人が男の人と手を繋いで歩いてるの見たんだけど」

男同士で手を繋ぐ、というのはあの兄が？

　柳玲子の言葉に、隼人は兄を思い浮かべる。隼人の兄である章人はまさに真面目を体言したような人間で、今まで浮いた話を一度も聞いたことがなかったのだ　が、もしかして女性と付き合ったことがないのは単にそういうことだったのだろうか。だとしたら見る目を改めなければならない。

　兄のあまり知りたくない類の秘密を知ってしまったかもしれないことに顔を青くした隼人はやがて、いや、何かの間違いだろう、とそれを却下した。

　確かに兄章人は隼人と顔立ちが似ているが、ありふれた顔立ちの隼人に似た人間など掃いて捨てるほどいるだろう。それに、やはりそんなことがあの兄に限って　あるわけがない。流石に生まれてから十六年付き合い続けた兄の性格くらい十二分に理解している。だから万が一柳玲子が見たのが兄だったとしても、男と手を　繋いでいたというのは絶対見間違いだ。

2

そしてふと楽しそうに顔を輝かせる柳玲子に気がついた。
何故彼女はこんなに楽しそうなのだろう　か。隼人が特殊なのかもしれないが、知人がマイノリティであった場合、隼人のようにそこにはある程度の困惑があるはずではないだろうか――少なくともこの　反応は一般的な反応ではないように思える――と、そこまで思ったところで隼人は漫画か何かで見た知識を思い出した。
そういうのを好む女性がいると聞いたことがある気がする。さて、それを何と言ったか。あんまり認めたくないのだが、もしかすると柳玲子はそれなのではないだろうか。
「お前腐女子って奴？」
「イエスッ！」
聞いてみれば、玲子はにこりと笑って肯定する。しかもサムアップとセットだ。見せられたつい惚れ惚れするような笑顔に、隼人は己の頬が赤くなってしまってはいないかとヒヤヒヤしながら、やはり、と落胆した。
別に個人の趣味趣向だからあまり文句は言いたくないが、それはこちらに被害がない場合だ。実の兄がそう誤解されているというのは既に大きな被害の気がする。
そんな隼人の葛藤も知らず、玲子はきらきらとした眼差しを隼人に向けた。
「隼人君、今日隼人君の家に行ってもいいかな？　是非お兄さんにインタビューをしたいの！」
警戒していたはずなのに投げられた特大球に、隼人は不審な反応を取らなかった自分を褒めてやりたくなった。
想像してほしい。好きな女子に家に行っていいか、と聞かれたら、問われた側がどう思うか。それが例えゲイと知り合いになりたいと目を輝かせるような女で　あっても、そして隼人の兄に会うの

が目的――しかも隼人の兄と、柳玲子の見たゲイカップルの片割れが別人の可能性が極めて高いというオチがつく――だとしても、だ。

　きらきらと期待に輝く眼差しは、今も隼人に言葉よりも雄弁に柳玲子の心中を語る。好きな女性から向けられるそれに抗えるような男がいようか、いや、いない。

「……いいけど」

「ありがとー！」

　結局隼人はそう返すことしか出来ず。柳玲子は大喜びで、ぴょんと跳ねてその喜びを全身で表す。その幼い仕草ですら可愛いと思えてしまうのだから最早病気ではなかろうか。

　そのまま放課後迎えに来るねー、と手を振る柳玲子を苦笑いで見送ると、少し間を置いて隼人の周囲にわらわらと友人達が集まって来る。どうやら彼等は一部始終を見ていたらしい。皆一様ににやけ面を貼り付けていた。

「よぉ隼人、」

「モテるねぇ青少年」

「やっちまう？　やっちまう？」

「いーいなぁ、俺もあんな可愛い子から迫られたいよ」

　思い思いのことを述べる友人達に、隼人は引き攣った笑みを浮かべる。彼等は遠巻きに見ていただけで細かい話の内容までは聞かれていなかったようだ。それに　ほっと心中で安堵する。柳玲子の言葉を受けて兄の件でからかわれでもしたら、柳玲子に向けられなかった怒りを全て爆発させていたかもしれない。

「そういうのじゃないって……」

　隼人は苦笑気味に返すが、友人達はまたまた、とそれを一笑に付すばかりだ。

「いいなぁ俺もそんなこと言ってみてえ」

「まず肉食系の悟じゃ無理だろ！　草食系だけの特権なんだよ！」

「あっはははは、敏樹、負け惜しみだろそれ。そういうのは草食系で

もせめて一度彼女作ってから言えよ」
「そうそう敏樹は恋人作るのが先決だろ！」
「ちょ、気にしてるのに！　ほら隼人もこっちのフォローしろよ！」
緩やかに、しかし確実に脱線していく話題に、それが自分の内容に返ってこないことを確信して、隼人は友人のフォローのために声をあげることが叶った。

3

「隼人君」
隼人が帰宅のための身支度をしていると、いつの間にかすぐ傍に柳玲子が立っていた。にこにことした顔で隼人を見つめてくる玲子に異性の家に行く緊張など微塵も見られない。隼人は嬉しいような悲しいような、複雑な気持ちになった。
柳玲子からすればただ単に己の趣味を追求させてくれる人を見つけただけなのだろうが、隼人の気持ちも少しは慮ってほしいものだ。
それでも柳玲子に控えめながらも微笑みかけて歩き出す隼人に、柳玲子がすぐそばをちょろちょろとしながらついて来る。荷物が重いのか足取りはよろけがちだ。
ふと、隼人はその中身が気になった。柳玲子の持つトートバッグがそんなに膨らむほど、玲子は何を入れているのだろう。
じ、と隼人がその鞄を見れば、柳玲子は隼人の視線に気がついたようだった。
「なあに？　隼人君」
「ん？　ああ、その鞄の中身は何かと思って」
首を傾げて隼人に問い掛けてくる柳玲子に、隼人がそう尋ねると柳玲子は目を輝かせた。
「えっ、　なになに興味あるの？　これは私のオススメの漫画でバトル物なんだけど主人公がもうほんとに総受けで次から次へと他のキャラに迫られて普段からもう誰彼構　わず男誘ってるんじゃないかってくらいもう誰からも愛されてボロボロになったりとかしてるところなんてもうヤら」
「ああうん分かったありがとう」
柳玲子の口の回りが余りに早過ぎるのと分からない言葉があったのとで、隼人にはその語る内容の半分も理解出来なかった。だが間違いなく隼人には知る必要のないことだったので、興奮気味の柳玲

子の言葉を遮り隼人は口早に礼を言った。
　隼人の言葉に一応隼人の意図は伝わったらしく、柳玲子はかなりがっかりした様子を見せながらも語りをやめた。
　そして拗ねたように隼人から視線を逸らしたところで、あっ、と声をあげ指を一点に向け指した。その指の先は興奮からか微かに震えている。
「いたっ！」
　何かを見つけた様子の柳玲子のその言葉に隼人は顔をあげ、そして視界に入ったその人物に目を丸くした。
「へ？」
　間抜けな声をあげてしまったのも仕方があるまい。何しろそこにいたのは遠目ながらでもよく分かる、
「ね、あの人隼人君にそっくりだから家族でしょ？　やっぱり手繋いでる！」
「あの人は俺の姉貴」
　隼人の兄ではなく、姉であったからだ。
　なるほど、と隼人は思った。隼人の姉はボーイッシュと形容されるタイプの女性で、時々女性に告白されたりするくらいには男に間違われるらしい。余り意識し　たことがなかったのだが、柳玲子の言葉からすると姉と隼人とは顔立ちが似ているらしい。そして例に漏れず隼人の姉を男だと思った、と。
　それにし　ても、と隼人は姉を見た。今まで隼人らの食事の準備だけで手一杯だと言い張っていたくせ、最近急にバイトをし始めたものだからどうしたかと思っていたのだ　が、どうやら男が出来ていたかららしい。隣にいる姉の彼氏はどちらかといえば姉よりも余程中性的な容姿だったが、本人達が幸せなら何も言うまい。
「ええっ、男の人じゃないの！？」
「うん、あれでもあの人は女。実際よく男に間違えられるらしいけどね」
　隼人の言葉に柳玲子はあからさまにがっかりした様子を見せた。

余程ゲイカップルと知り合うことを楽しみにしていたらしい。
そのままこちらに気付くことなく歩いていく二人を見送り、それから柳玲子が大きな溜め息をついた。
「あーあ、残念。折角ゲイカップルに巡り会えたと思ったのに！じゃあね、隼人くん」
そのまま帰ろうとする柳玲子の言葉は、しかし途中で途切れることとなった。隼人が柳玲子の腕を掴んだからだ。
隼人は柳玲子に対して、非常に紳士的だった。柳玲子の言葉尻を掴まえて家に連れ込んで良からぬことを、などということだって考えないようにしていた。だが。
男として全く意識されていないからといって、気持ちを伝えたら迷惑かと遠慮する必要もないのではなかろうか。用は済んだとばかり帰ろうとする柳玲子に、隼人はそう思い始めていた。
「あのさ、」
隼人は口を開いた。

4

柳玲子はがっかりした。玲子の予想では受けに分類されそうなクラスメイト（攻めには仲がよさそうななんちゃら悟君とかどうだろう）に声をかけ、とうとうゲイカップルと知り合えるかと思ったのだが、どうやらその人は隼人の兄ではなく姉であったらしい。

玲子はがっかりした。これで男装萌えがあればテンションがあがったろうが、残念ながら男装など結局は男女カップルなのである。

寧ろ玲子は女装萌えだった。可愛い女の子かと思ったら実は男だったが女でないと分かった今でも好きという気持ちはもうごまかせない、などという展開などは特に好みだ。ゲイカップル最高。

——話がズレた。

そういうわけで、玲子はそれ以上隼人の姉について接触しようとは思わなかった。

「あーあ、残念。折角ゲイカップルに巡り会えたと思ったのに！じゃあね、隼人く」

帰り際付き合ってくれた友人にそう感謝を述べながらも、玲子の脳内は既に六時半から放送される玲子の愛するアニメのことでいっぱいになっていた。のだが。

玲子はそこで何故か隼人に腕を掴まれ、口を閉ざすこととなった。自身の用はもう済んだし帰りたいのだが、と目線で訴える玲子に、しかし隼人の言葉がそれを許さない。

「あのさ、」

その言葉に真摯な響きを感じて、玲子は隼人の顔を見る。その隼人の口から落とされた一言に、玲子は目が点になった。

「あんまり簡単に男の家に行くって言わないほうがいいよ。そういう意図がないにしろ、期待するから」

ろくに話したことがないクラスメイトからのその忠告に、玲子は目を丸くした。まさかそんなことを自分に言う人がいようとは、と

いう驚きである。言われている内容はＢＬでよく読む展開だが、クラスメイトの名前もろくに覚えていない自分にそんなことが起こるはずもない。
玲子は軽い調子で笑って否定する。
「大丈夫大丈夫、私に興味ある男なんていないないし、それに、」
玲子はそのまま三次元の異性に興味などないのでその類の忠告は不要だと言おうとした、のだが。
「特に俺、前から柳さんのこと好きなんだけど」
聞こえてきた言葉に、玲子は一瞬自分の耳が故障したのかとさえ思ったほどだった。
どう見ても草食系のこの隼人君がろくに話したことがない自分のことを好き？
これがＢＬならば読んでいて一途健気攻め萌え、などと盛り上がれるところだが、実際自分に使われるとどう反応したものか。玲子からすれば全く想定外の言葉でしかない。
「柳さんが俺のフルネームも覚えてないのは分かってるけど、そういうことだから」
「ふぇっ？」
そんな風に困惑しているうち、話を聞き損なったらしく気がついたときにはそんな言葉を吐かれる。分からず聞き返せば、困っているような苛立っているような何とも言えない表情を隼人君が見せる。
「わかんない？　俺、告白してるんだけど」
言われて玲子はそろそろこの隼人君について理解が出来なくなってきた。こういうタイプの人間だったのだろうか。だとしたら受け攻め判断をし直さなければ――じゃなかった。まずどうしたらいいのだろう。
「俺、佐野隼人っていうんだ。まずは名前から覚えてよ」
にこりと見せられた笑みにどう反応していいのかすら分からず、曖昧に頷く玲子に、隼人君はまた明日、と手を振って走っていってしまう。

残された玲子はそのうち言われた内容に漸く実感が湧き、はぅぅ、と頬に両手を当ててしゃがみ込んだ。

なんだ今のは。実際の男の人も皆ああいうものなのだろうか。クラスメイトを、いや、ほとんど全ての男性をそういうふうにしか見たことのなかった玲子はぐるぐると考え込むが、結論が出るはずもない。

結局、玲子がはっ、と我に帰ったのは六時半を少し過ぎ、玲子の愛するアニメが放映されている時間帯で。

玲子は初めて愛しているアニメをリアルタイムで見損なったのだった。

4（後書き）

ここでこの二人はひとまずお終いです。

1

河野里沙は男性が苦手だ。特に自分と年齢の近い異性との会話はうまくいかない。これは自他共に認める真実である。学校の教師だとかそういう人間ならば自分とは遠い存在だと思えるからまだそこまで気にならないのだが、これがクラスメイトともなれば最早里沙がまともに話をすることはほとんど出来ない。
「な？　ちょっとの時間だけでいいからさ」
だから、里沙は今非常に困っていた。ナンパをされているのだ。相手の年齢は分からないが、比較的近い気がする。そんな相手と一対一で話すなど、里沙にはかなり困難だったのだが、相手はそれに気がついてくれる様子がない。
夏休みで学校は休み、だからとばかりに真昼間から一人で出歩いていたのが悪いのは分かっている。おまけに、里沙が友人である遥や百合と合わせて比較的派手と言われる類の姿かたちをしているのがそれに拍車をかけているのだろう。大人びた容姿も相俟って、街を出歩くと時々こういうことがあった。要するに軽い人間だと思われているのだ。
誤解を受けないようにするには単にそういう恰好をやめればいいのだが、折角仲良くなれた友人に馬鹿にされたくもないのでやめるにやめられないのである。それでこうやって絡まれては悩む羽目になるのは分かっているのだけれど。
「ほら、そこで食事奢るからさ」
こうしてナンパをされたときにはいつもごめんなさい、と言って走り去ることにしているのだが、相手に腕を掴まれている今それは叶いそうにない。
どうしよう。
里沙がそう思ったときだった。
「おにーさん、嫌がってんだからやめてあげたら？　もううまくい

かないって」
軽い口調と共に、里沙の手を掴んでいる男の腕を押さえる男の登場に、里沙をナンパしてきた男は目を丸くする。
「べ、別に何もしてたわけじゃ」
ごにょごにょとはっきり分からないことを言いながら、しかしわざわざ他人に窘められてなおごり押しできるほどの人間ではないらしい。男はすぐ周囲に視線を走らせると、そのまま逃げるように駆け出していった。
後には里沙とナンパを止めてくれた男だけが残る。にも拘らず、里沙は引き続き居心地の悪さを感じていた。何しろ先程のナンパ男はいなくなったものの、残ったのも先とは別人とはいえ男性なのだ。かなり気まずい状況だといえる。助けてもらったのは確かなので感謝を伝えなければならないが、さて何と切り出すべきなのか。
「……あ、あの、――ありがとうございました……」
結局何と言ったらいいのか考えたところで答えは浮かばず、可もなく不可もないものだけが里沙の口をついて出た。
「ああ、うん気にしないでいいよ」
里沙を助けた男はさらりと何でもなさそうにそう言って、にこりと笑った。里沙はそこで漸く男の容姿をはっきりと見た。先程の男よりも更に若い男で、里沙と同じ高校生だろう。夏の日差しに照らされて茶色の髪が眩い。人懐こい笑顔を見せている。
なれなれしい男も苦手だが、爽やかなタイプも里沙はあまりお近づきになりたくなかった。尤も、里沙の場合どんなタイプでもそうなのだが。

2

男はその笑みのまま、里沙に問いかける。
「さっきから気まずそうだけど、もしかして男が苦手なの？」
会ったばかりの人間に核心をついた言葉を発され、里沙は嫌な汗が背を辿るのを感じた。真夏の暑さのせいだけでない汗に、里沙は目を閉じたくなる。先程までと全く状況がよくなっていない。目を瞑ることとこそしないものの、里沙の視線は自然と下がり、俯きがちになる。
言葉を発せず俯いてしまった里沙に、男はあ、と声をあげた。その声の大きさにびくりと里沙は肩を震わせる。
「ひぅっ！？」
「財布忘れた」
そのまま何かを探すようにごそごそと探し出す音に、男の興味が里沙から外れたことを知る。己から男の視線が外れたこともあって気が楽になった里沙は、そういうわけで漸く視線をあげることが叶い、男を見つめた。
男はそう言ってポケットに手を突っ込んでいる。焦っているのか少し青い顔をしている。何か買いものでもしに来たのだろう。道行く人々の中には焦っている男に好奇の視線を向ける者もあったが、大抵誰もかれもそんなに暇な訳ではない。そのうちに男への好奇の視線は逸れていった。
「くそっ、母さんが煩いよなぁ……」
そんな周囲の変化にも気がついていないのだろう、男は本気で焦っているように見えた。流石にそんな様子を暫くの間見てからじゃあ、と見捨てられるほど里沙は人への心遣いが出来ない訳ではない。あまり話しかけたくないのだけれど、と思いながらも、里沙は渋々声をかけなければならなくなった。
「あの……お金、貸そうか？」

「え！？　いや、いい、悪いし今日でなくてもいいし」
里沙がいることを忘れていたようで、或いは里沙がもう帰ったものと思ったのかもしれないが、男は里沙の言葉に初めて里沙の存在に気がついたようだった。それから、里沙の申し出に焦ったように首を振ってそれを拒絶する。その反応に里沙は複雑な気持ちになった。
勿論素直にお金を貸してほしい、と言われても多分もやもやしたのに違いないが、折角善意から申し出たのにもそういう反応を取られて楽しい思いをする訳はない。
「……まぁ、それじゃあ……」
諦めて里沙はそう言って立ち去ろうとした。
しかし里沙が数歩歩いてもまだ財布を探してわたわたしている男を見ていると、どうしても見捨てて置けない気分になる。大体、財布を取りに行けばいいのならば早く家へ向かえばいいのに。早く行けばいいじゃないか。
そう、例えば先程ナンパやろうから自分を助けてくれたように。
そんな風に思ったら、里沙は彼女らしからず男に対してどうしても者申さなければならないような気持ちになった。
「お金、何買うの」
里沙は男の手を掴む。男がきょとんと里沙を見た。それはそうだ。男は里沙が男性不信だと察したらしいのに、里沙が異性と積極的に関わろうとしているのだから。
「え？　いや、いいよ」
「な・に・を・か・う・の」
一文字一文字区切って問いかけると、男は困った表情をしながら、じゃあ本屋へ、と行き先を白状した。本屋といえば、この辺りにあるのは一店だけだ。里沙もよくファッション雑誌を買ったりするのにそこを利用している。
全国展開しているその本屋は品ぞろえがよく、そのためこの辺りにはその本屋以外の本屋が全くないにもかかわらずあまり目的の本

がない、などという経験をしたことがない。この男もその書店に用があるのだという。

里沙はそのまま男の手を引いて、書店を目指す。里沙の勢いに気圧されたのか、男は何も言わずにただ大人しく里沙の後をついてくる。

自分でも何を馬鹿なことをしているのだろうと思ったが、興奮状態の里沙は幸か不幸か自分がしていることの自覚は余りなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6629y/

勘違い行進曲

2012年1月10日23時48分発行